

は し が き

本報告書は、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」の研究項目A02「地域性の形成論理」に属する公募研究「東南アジア大陸部における民族間関係と『地域』の生成」での研究成果の一部をまとめたものである。研究班は、高谷紀夫（広島大学総合科学部助教授／平成7年度研究者代表）、林行夫（京都大学東南アジア研究センター助教授／平成8年度研究者代表）および長谷川清（岐阜教育大学外国語学部助教授）の3名が構成し、東南アジア大陸部のビルマ、タイ、ラオス、西南中国を対象地域としている。とりあげた民族は、国境を接した複数の国家にまたがるシャン、ラオ、タイ・ヌー、タイ・ルーであり、一国研究を越えた国家と民族、地域の生成と動態の複眼的な記述およびその視座の検討を企図したものである。タイ族が中心であるが、同様の状況にある他の民族についても、内外からの研究協力者による発表報告を組み込むことで、広く東南アジア大陸部の民族と地域の現状を捉えようとした。

高谷の（確定困難な状況にあった）ビルマへの長期出張予定のために、二年度目は現代表者（林行夫）に変更されたが、研究の趣旨と活動内容に変わりはない。研究の背景と本報告書の概要を示した次節の末尾に、これまでに実施した研究会一覧を再掲してある。この場をお借りして、研究分担者以外で研究会に出席し報告の労をとっていただいたすべての方々に、深甚なる感謝の意を表したい。また、研究会の常時出席者であった馬場雄司（同朋大学社会福祉学部助教授）が、研究分担者が扱ってきた地域と問題意識をリンクさせる報告資料を寄せてくださったことにもお礼申し上げる。その結果、ビルマ、ラオス、東北タイ、北タイ、西南中国に居住するタイ系諸族を中心とする民族、国家、地域の複合的な諸相とダイナミックスを、多少なりとも立体的に伝えることができたのではないかと思う。いうまでもなく、個々の報告は完成論文ではなく、今後さらに追求されるべき問題を明らかにするための整理途上の産物である。本報告書に目をとおしてくださった方々から批判を賜ることができれば幸いである。

なお、編者が本報告書の編集にあたって行ったのは注記、文献リストなどフォーマット上の統一にとどまっており、各論ごとの地名、民族名称にかんする現地語の邦語表記あるいは翻字表記の原則が厳密には統一されていないことをお断りしておきたい。

1996年11月30日

編者